（研究ノート）

生と性の日常性

小椋　芳子

Life and Sex in Our Daily Life

Yoshiko Ogura

要約

筆者は保健師として、30数年間地域の子どもや親、教師を対象に性教育を実践してきた。旧態依然としたオーソドックスな性の課題から、インターネット社会などから得る特異的な先鋭化した情報まで、今日性を捉えた性教育が要求される。今回は幼児、児童、思春期の性教育の実践し、性を普通の日常生活に位置づけることを中心課題にとりあげた。人間として一人ひとりの生涯を見通して、愛と性をどのように生きていくのかを問いかけてきた。知識で終わらず判断力、行動力のもてる教育を丁寧に誠実に、できるだけわかりやすい言葉で行ってきた。あふれる性情報の中で、周りの大人たちの「愛と性」が、いま、試されている。

キーワード：　保健師　性教育　実践　幼児期　児童　思春期

2006年10月17日受理（実践研究））

はじめに

保健師として30数年にわたり、地域保健活動のひとつとして性教育を実践してきた。地域の住民のニーズに応える中で積み重ねてきた性教育の実践報告である。実践では1－2時間という限られた時間、20－300人の限られた対象のニーズに合わせて、きわめて具体的な課題に対峙してきたものである。教師や医師と違って、生活の日常として性をとらえた教育の実践である。生活に浸み込んでいるはずの性の課題が、実生活ではプライベートを隠れ蓑に潜在化している。そんな中で、地域のこどもや母親の悩みは表面化せず深刻である。現場から学んだことは、性は生まれてから死ぬまでの「生と性」として捉えるということである。思春期だけでなく、成人期、老年期を見通し、どのように生きるのかを問う性教育が全ての世代に必要である。今回の実践報告は思春期までであるが、大人の性について報告できるように、今後も一つの研究課題としていきたい。

1、性教育実践への導入

1）母性保護講師団活動の開始

1966年に大阪府に採用され保健師として池田保健所に勤務したが、左藤府政下では、母子保健に携わる保健師自身の流産が府議会で取り上げられるほど、母性保護の問題は深刻であった。筆者は、衛星都市などの労働組合女性部の学習会で、生理休暇の必要性、流産の予防などをテーマに講師活動を開始した。母性保護は性を基本とする課題なので、性教育活動への踏み出しは自然の流れであった。

2）習慣性流産の予防に悩む

1975年国際婦人年中間年の国際会議が、デンマークのコペンハーゲンで開催され、大阪府は府下の婦人団体を「海外セミナー」に組織して派遣をきめた。ＮＧＯの会議に参加するためであったが、労働組合女性部の役員として参加することになった。そのときの団員であったM病院のＡ医師に、仕事で悩んでいた習慣性流産の原因や予防について質問した。（習慣性流産とは自然流産の３回以上の繰り返しをいう）Ａ医師は原因不明の流産も多いが、原因の一つであるホルモンの異常と流産傾向について、初回妊娠の中絶が妊娠持続ホルモン（黄体ホルモン）の分泌低下の引き金になりやすいと説明された。当時、習慣性流産の女性に、保温、絶対安静などの保健指導を日常的におこなっていたが、万全を期しても、流産したときの本人の落胆は大きく、保健師も無力感におそわれ悩んでいた。Ａ

医師の言葉で、望まない妊娠をしないための性教育が習慣性流産の予防の一つではないかと気づいた。

そこで早速、訪問国のスウェーデンでは低学年、高学年用の性教育の教科書を購入した。小学校の低学年用の教科書は20ページほどの小冊子である。表紙を開くと家族4人が（父母、子ども男女）全裸で手をつないでいる写真であり、外見上の大人と子ども、男女の違いが分かる。次はお父さんとお母さんがセックスしている絵が、明るい色で、スケッチ風に描かれており、ごく自然な行為として理解できる。次は妊娠中のお母さんの写真であり、だんだん大きくなるお腹が目の前に迫ってくる。胎内写真も出産への期待感が高まる構図になっている。次の出産場面では、赤ちゃんの頭が今、出ようとしている写真がアップでリアルに迫ってくる。生まれた赤ちゃんがお母さんのおなかの上に載せられているところでは思わず笑顔を誘う。最後は小学校低学年用の教科書でありながら避妊方法として、特にコンドームが強調されていた。スウェーデンでは小学校で、避妊の知識を含めた性教育を繰り返し行うそうである。中、高校生用の教科書は専門書のように分厚く、日本の歌麿の絵が載っており、より高度な内容である。

スウェーデンで性の実態について質問をしたところ、「日本の男性ほど不潔な人種はいない」と言われた。当時、フリーセックスの国といわれていた、スウェーデンの男性の発言なので真意をただした。すると「日本の男性は片手で妻の襟首をつかみ、空いた手で他の女性と遊ぶではないか。我々は、付き合っている女性（妻など）がいれば、きちんと別れて、フリーハンドで新しい女性と付き合う」というのである。当時のスウェーデンは、フリーセックスの国として日本のマスコミは伝えていたので、筆者は性のルールもなく自由奔放だと理解していた。だから男性のこの言葉は以外であったが、これこそ本当の自由と男女平等の基本的な人権の思想だと思った。当時の日本では、浮気の相手の女性には「愛人」「内縁関係」「男に弄ばれる」といった言葉が横行していた。一方で男性社会に都合の良い「浮気は男の甲斐性」「据え膳食わぬは男の恥」「妻に分からないように遊ぶのはいい」といったことが、日常的に語られていた。昔から女性は、「傷物」「出戻り」「行かず後家」「行き遅れ」「産まず女」などマイナーな言葉で取り巻かれていた。幸か不幸か日本もエイズの流行で、一定、性の意識は変化し、不特定多数を相手の性は危険な性行為だという認識は広まってきた。

スウェーデンにおいて、触れた性教育の実態は衝撃であり、帰国してから性教育に本格的にとりくむきっかけになった。

2、性とは

生物の生殖は種族保存の生理的営みであり、生物学的には性は「いのち」そのものです。

湯浅精二著の「生命150億年の旅」から抜粋し命の誕生に触れてみたい。[1] 150億年前の宇宙大爆発から100億年後、(今から50億年前) 銀河系に太陽が誕生し、46・5億年前には地球が誕生している。35億年前生命が海中の植物として誕生した。海中の生物は酸素を空中に放出し、生物が陸上に出ても紫外線でやけどをしない程度のオゾン層が完成したのは3－4億年前であり、それ以降生物が陸に上がるようになった。

動物のほとんどは無性生殖だというが有性生殖でも、水中の生殖行為と陸に上がった動物の生殖行為とは大きく違う。水中動物は精子、卵子を水中に放出して受精が成立するが、陸の動物は精子、卵子の乾燥を防ぐため、交尾（性交）という生殖行為を通して雄が雌の体内に確実に精子を送り込むのである。

陸の動物でも人間の生殖行為は大きく違う。人間はどこまで動物か（アドルフ・ポルトマン著）[2] にひとつの記述がある。中枢神経系と生活様式の項で「動物ではあらゆる本質的な行動様式が、本能と呼ばれる生物学的な前提から規程されているのに、人間の場合では、もっとも本能的といわれる行動の部分、たとえば性（セックス）の領域さえ個人的な決定という、はるかに自由な選択に任されている。これほど直接に種の保存に関係の無い他の生活領域では、この自由な決断という可能性は、さらに一層大きい」と記述している。その理由として、「人間は大脳皮質の著しい発達と、その機能の高度化だとしている（質、量の増加）。つづいて、本能体制の相対的な弱体化は、人間では他の中枢的な動機体系が著しく高揚されているから」と述べ、大脳半球が大きくなる関係性で説明している。さらに「大脳半球の指数は人間では170、チンパンジー49、象は70、他の哺乳動物は0.7－32の間と示している。この動機体系を意志と名づけることができる」と述べている。そして、「人間の動機体系の特殊性を判断する場合、いうまでもなくこの体系を統制するホル

モン的な要因を過少に評価してはならない。ホルモン分泌腺などの物質的基礎は哺乳類動物の一般にみられる状態と同じである。しかし、動物の生活にあのように特徴的な周期的なホルモンによる動機体系の活動、つまり、交尾期と性的無差別との規則的交替現象は、高等な霊長類ほどいい加減になって、人間ではほとんど完全になくなっている。ホルモンの働きのうちでも、もっとも著しい性的成分が一年中たえずはたらいていることは、人間生活にまったく特別な結果をうむことになる。一方では人間の動機体系が絶えず性的になる。しかし、また性的活動性が、同時に他の絶えずはたらいている動機と意味深く相互に浸透しあうことにもなる。動機の高揚と、人間の世界体験のすべては、性的要因が持続的にはたらくことで、どんなに特別な色合いをおびてくるかは、だれもが認めるところだろう。極度に混乱する状況では、まさしくこのはたらきに、絶対的な優位が帰せられるが、しかし、性衝動は同じように絶えず、制御されていることももっと注目されていいだろう」と述べている。これらから、人間がホルモンの作用で本能的な性衝動として存在する部分を持ちながら、自分の意志でコントロールする性的活動を営むことができる理由が理解できる。

以上の引用文献から、動物では生殖行為そのものである性が、人間では生殖性、快楽性、愛情、連帯性の手段として、いつでも生活の中に存在するといわれていることも納得できる。

3、子どもたちの性の実態

性の低年齢化がいわれているように、氾濫する性情報は様々な影響を与えている。筆者は、3－4人の小学生がポルノ漫画を、道路でまわし読みしている現場に出あったので、どこで手に入れたのか聞いてみた。子どもたちは、こそこそ相談して、秘密にするなら教えると言うので、「誰に聞いたかは言わないよ」と約束した。こんな漫画が欲しいのなら2箇所、駅のゴミ箱か、高速道路の信号のそばの出口のゴミ箱にいつでもあるよと言う。家に持って帰るのかと聞くと、公園の石垣の隙間に丸めて隠して置くのだというのである。このように筆者の経験や一般的にも、小学生がポルノビデオを見ている実態が把握されている。そのビデオの多くは、家に隠してあるもので、お父さんのものが圧倒的である。(中には兄とか、先輩もある)

小学生の妊娠例や、レイプ、性犯罪がらみの殺人と、子どもをめぐる性の環境は複雑で、性教育のニーズも多様化している。

思春期になると大きくは、十代の人工妊娠中絶と性感染症の課題がある。十代の妊娠でも以前は母親が困って相談に来る例が殆どであった。公立高校の養護教諭の話では、最近の母親の中には、赤ちゃんが好きなので娘の妊娠が嬉しいという反応があり、少数だが増えつつあると報告していた。中には母親の子どもとして育てる例もあるという。

エイズ、援助交際、マイノリティーの性なども含め、ピュア・エデュケーションの取り組みが、最近効果を挙げていることが報告されている。

4、性教育の実践

1）性教育の基本

性教育の重要性は、大人の役割として重要である。性をタブーにしているのは大人である。子どもが性について、自然に「不思議」を発見し、親や保育士など身近な大人に問いかけたとき、多くの人は慌てたり、狼狽したりいつもの優しい顔が一変する。敏感な子どもは、こうした質問はどうも大人を困らせることであると認識し、次から求めなくなる。子どもの初めての性との出会いを、周りの大人は祝福し励まして欲しい。一言「いい事に気づいたね」と笑顔で迎えて欲しい。

筆者は性教育を行う際に①態度は誠実に、(性は大切なもの) ②明るく前向きに、(いやらしいとか隠すものという意識を無くする) ③わかりやすく真実を、(嘘やごまかしで無く) を原則に行っている。

教師や親からの質問は、性教育は、①いつ、②誰が、③どこで、④どのようにおこなうのか、という内容が多い。①いつ、については、性教育は子どもが性に関心を示したときに行うのが一番効果的である。つまり子どもが、性の質問をするときや、逆に性に関する出来事から目を反らせ、茶化すなどと否定的に捉えようとしているときがチャンスである。現実には周りの大人は、なるべく性を避けて通りたいという意識があるので、せっかくのチャンスを見逃すことが多い。②誰が、については、子どもに接する人は、親、教師は勿論、大人は誰でも性を語れるようになりたいものだ。③どこで、については、性教育と構えて集団で行うだけではなく、個別の生活の中で自然に行えるようになりたいものだ。今でも学校に任せきりの親が多く、一方で、教師の中でも苦手意識を持つものが多いのが現実であ

る。つまり学校でも家庭でもどこでも行えるように条件を整えていきたい。④どのようには、それぞれの年齢の子どもに分かる言葉で、ハートを込めて行いたい。性をポジティブに伝えるには、大人が人間として豊かな愛のある生活を送ることが重要である。憎しみや悩みが深い生活者が義務感で行うと、子どもは性をマイナーに捉え、愛を育むイメージを持つことは困難になる。

2）対象別性教育（各論）

（1）幼児の性教育実践

筆者の性教育の実践は1970年後半ごろ幼児向けの内容から始まった。保健所の健診でお母さんから、子どもに「赤ちゃんはどこから生まれるの」「どうしておちんちんがないの」と聞かれて困るとか、中には夫婦のセックスを見られたという深刻な内容もあった。保育所や幼稚園で講演するので対象者は母親が多い。幼児期の課題の一つに「おチンチンいじり、幼児の自慰行為」がある。いつも耳たぶを触っている子どもが居るように、おチンチンいじりは、「たまたま触ったら気持ちよかった」というのが癖になったもので、性的な意味はない。その行為が習慣的となった結果、意識的に「気持ちよさ」を目的に行うようになるのが幼児の自慰行為である。母親が「いやらしい」とか「止めなさい」という否定的言語で一方的に叱責すると、子どもは「後ろめたい」惨めな気分になり、隠れたところで習慣化し、止められないことが多い。自慰行為を見たら「お外に行こうよ」「本を読もうね」と気長に他の遊びに転換させる。母親が繰り返し働きかけると、子どもは自慰行為がどうも母親に期待されない行為と気付き、止める努力をするとか人前でしなくなる。大体は、成長とともに遊びの世界が広がり生活も豊かになるので、いつの間にか消滅するものなので、人前でしなければ問題視しないほうがいい。

幼児期の次の課題は、「赤ちゃんはどこから生まれるの？」である。幼児の目の前に迫っていた、母親や保育士など身近な女性の大きなお腹が、お産で急に小さくなると不思議で「あの大きな赤ちゃんは、いったいどこから外の出たのだろう」と疑問をもつのは当然である。子どもの質問にあわてたある母親が、自分のお腹の中心線を見せて「ここがパット割れて出てきたの」といった。子どもは「痛いね、怖いね、お母さんかわいそう」といったというが、これでは恐怖しか残らない。ある母親は「遠い山からコウノトリが運んできたのよ」と答えたところ、翌日子どもは浮かない顔で「僕の誕生日はコウノトリが山を出たとき、それとも家についたとき？」と真剣に聞いてきたという。

一つの例だが、幼児には「おしっこの出る道は」と聞くと「ここ」と前をおさえる。「うんちの出る道は」と聞くと「こっち」と後ろをおさえる。「女の子には、その間に赤ちゃんの通る道がもう一つあるよ」と教える。「頭って硬いでしょう、赤ちゃんの頭も硬いから、狭い道を一生懸命広げてがんばって出てくるよ」と絵本などで見せると一応納得である。それでも分からなかったら「もうすぐ、大きくなったら分かるのよ、また、教えてあげようね」というとそれで納得する。大人の一生懸命さに子どもは納得というより、満足するのではないかと思われる。

（2）小学校低学年の性教育実践

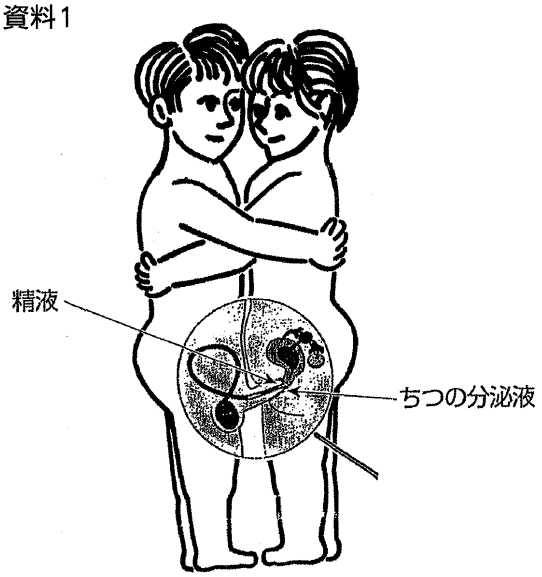
対象は、子どもや親、教師などである。低学年では「赤ちゃんはどこから生まれるの」から「どうやって子どもはできるのか」まで、つまり生殖行為に関心がうつる。一番大変なテーマである。まず人間の進化論を踏まえて、卵が受精して、母親の胎内では胎児が10ヶ月の間に進化の過程をたどって生まれてくることを理解する。人間は海から生まれた命であり、初期の胎児は魚の形をしているよと胎内写真を見て確認すると感動が生まれる。「ほんとや」「すごい」などと写真をくい入るように見る。

子どもには、大きな絵を使って、「お母さんの赤ちゃんの素の卵子はこんな奥で、お父さんの赤ちゃんの素の精子が来るのを待っているよ」と説明する。子宮とつながっている長い卵管の奥（卵管膨大部）を示すのである。「だから、お父さんの精子は勢い良くお母さんの膣、ここに出されるよ」と説明する。「勢いよく出さないと卵子にたどり着けないよ、勢いよく出すために男子のちんちんはペニスといって、ピストルのように長いよ、おしっこも勢い良く出るよね」というと、男子は自分のおしっこがどこまで飛ぶかお互いに自慢することもある。子どもにいい加減は通用しない。すかさず「お父さんの赤ちゃんの素はどうやってお母さんに届けるの」とか「分かった、エッチするんやろ」と反応する。「エッチではないよ」とここは人間の尊厳をかけて丁寧に説明する。「大好きだから合体するのよ、赤ちゃんの素が外に出たら死ぬからね」と絵を見せる。（資料1）子どもはアニメの合体を連想して

楽しくなるようだ。すかさず、「あのね、大人になるということは、子どもが産める体になるということよ」とまず成長の期待について触れる。「でもね、大人は子どもをいつでもは産まないの。お父さんとお母さんが産もうと思ったときしか産まないよ」というと「えっ、弟がほしいのに」とか「なーんや」とか賑やかである。「子どもを産むって素晴らしいけれど大変なことなのよ、病気をしたら心配だし、夜中に泣いて起きたらおっぱいを飲ませるでしょう。毎日ご飯も作らないといけないし、大人って大変ね。だから2－3人しか産めない人が多いね」といいながら何人兄弟か発表させる。クラスには4人5人という兄弟の子どもが居るので、素直に「すごい」という歓声が実感をこめて上がり、尊敬のまなざしで見られるのである。

お母さんは女性というべきであるとか、おちんちんというべきではないとか厳密さを追及する人も居るが、子どもの感覚に近い言葉で語りかけ、正確さより分かりやすさを選んで行っているが、今まで直接に批判されたことはない。

資料1

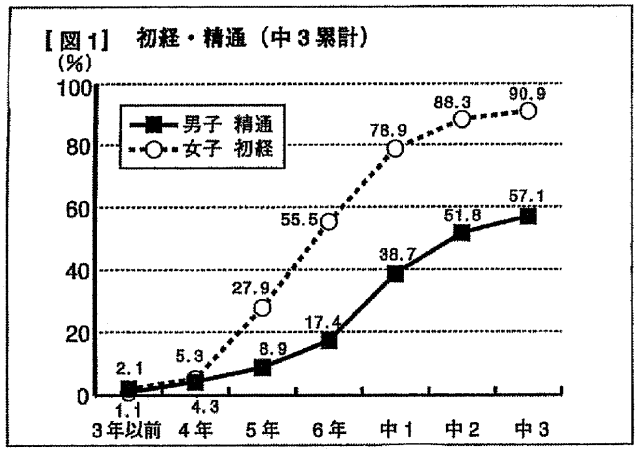


3）小学校高学年の性教育実践

からだの教育は早めに行う方がいい。初潮の発来、精通現象など、性の目覚めは成長と共にある日突然にやってくる。クラスでも早熟な子どもは、心の準備もなく第2次性徴が始まり、時には大きな心の傷を負い、深い悩みをかかえてしまうことになる。小学校4年生で初潮を経験するのは5・3%である。（資料2）勿論、小学校2、3年生の例も報告されている。ある事例では、校庭で遊んでいた女児が、「スカートに血がついているよ」と他の児童に指摘された。トイレで泣いて困っているときに、担任が手当てをしたと言うが、その子どもの負った心の傷は深刻である。両親が早熟であったら、子どもの成長も早いと予測して準備すべきである。初潮の意味も分からないで初潮を迎えると不安と恥ずかしさで、性に対する嫌悪感や自分の性を否定的に捉えることにもなりかねない。男子の精通現象も病気とかオネショと思い込み、悩みにつながる場合もある。成長に喜びや誇りが持てるように両親の事前教育が欠かせない。親は子どもが居ることがどんなに幸せかを伝え、「あなたにも子どもを産む準備が今から始まるよ」と具体的にやさしく告げておく。大人になるためにみんなが経験するのであるが、未知ゆえに不安を持たせないように丁寧な対応を望みたい。この時期の個人差が一番大きいので、個人差があることもきちんと押さえ、早熟な子どもや発育の遅い子どもが劣等感を持たないように、細心の気配りが親と教師に必要である。クラスの半数が体験するころは（小学校5年生）、子ども同士で学び合うことが多くなる。なぜ体育を休む人が居るのかとか、身体検査のときの個人差になどに関心があつまり、あちこちでひそひそ話が始まるなど、第2次性徴の違いをお互い認識し合うのである。

筆者が、ＰＴＡの講演で「日本では初潮は赤い赤飯を炊いて祝うので、精通現象も牛乳で乾杯して祝ってほしい」と言ったとき、「初潮は分かりやすいが精通現象は分からない」と反論された。そこで、精通現象が察知できるシグナルを紹介した。洗濯物の出し方が変わったとき、急に部屋に勝手に入るなと言い出したとき、ティッシュの箱がどんどんなくなるとき、母親と目を合わせなくなったときなど、というと「それなら分かるわ」と大受けであった。

資料2　2005年性教育研究会調査



4）思春期の性教育実践

（1）思春期の課題―アイデンティティの確立

思春期には性ホルモンの分泌が盛んになり、異性への関心が高まる。と同時に劣等感に悩み自己肯定感がもてない時期である。遺伝子が決める身長や容貌に悩む時期でもある。昔の親は、その子の良さを自信に繋ぐ子育てができた。お前は働き者だから家業を継げる、気立てがいいので嫁にいける、勉強できるから大学へいけると、子どもそれぞれに生き方を助言できた。最近では、日本の子育ては「賢い子に」という目標が一番多く、学力がないと全て評価されない。西欧では学力はともかく「一人で生きていく力をつける」を第1の目標に子育てするといわれている。

中学生には「遺伝子には悩まない、努力して変わることで成長しよう」、「自分に惚れないと、人も惚れてくれないよ」と話す。「身長だけで人をみない、身長が低くても笑顔でイキイキと胸を張って生きている人は魅力的」と挑発的な例え話もしておく。低い、禿げ、くさいはもてない3要素だと若者が言うので、中学生から禿を心配するご時世である。周りの大人が「あなたはあなたでいいよ」というメッセージを送ることが、今の選別教育体制の中ではとても重要だ。

（2）愛ってなんだろう

若者は「愛があれば何をしても良い、セックスもオッケイ」という。そこで「愛って具体的になんですか」と聞いてみる。「そんなことは説明するものと違う」「要するにフィーリングが合えばいい」「可愛かったらええ」という。「健康で、美しくて、よく稼ぐ時だけチヤホヤして、年をとったり、病気になったら別れようという人でもいいのか」と突っ込みを入れると、返事ができなかったり、「そら、やっぱりあかんで」と気付く若者もいる。愛の本質が分かっていなくて、夢見る若者のままである。周りの大人はきちんと愛の哲学をもって若者に接してほしいものだ。教会の結婚式で「汝、健やかなる時も病めるときも、富める時も、貧しき時も」の誓いの言葉は愛の真髄をついていると思うので教育に取り入れている。本学の学生の恋愛も長続きしない傾向があるように、3ヶ月サイクルの恋愛である。理由は「合うと思ったのに、付き合ったら考え方が違うことに気付いた」というものである。「違って当然、好きならお互い話し合いなさい」というのだが、次々相手が変わるのも平気である。先日も「俺は7ヶ月付き合っているので、クラスで2番目」という。一番は1年以上のカップルだという。付き合いがセックスから始まるカップルは別れが早い。充分に話し相手、相談相手、遊び相手、喧嘩相手の付き合いをした結果のセックスでありたい。セックスは「誰にも見られたくない部分で付き合う究極の行為なので、誰でも良いというものではない、もっと付き合いなさい」と筆者はいい続けている。離婚が多いのもこの延長線ではなかろうか。

（3）男女の違い

男性の性は、精子、精液などの倉庫（精巣上体、精管など）があるので、性欲が衝動的である。溜まった、いらいらすると言う男性の性表現に対し、女性は性の倉庫を持たないので、排卵期に卵胞ホルモンがピークになり「その気になりやすい」くらいのものである。男性は一気に性交欲に達するが女性はまず①異性にあこがれ、②接近欲③接触欲でストップ、④の性交欲には、性交の結果妊娠をしない、または、妊娠したら産むという確証がないと到達できないことが多い。望まない妊娠をした女性は「私は一緒にいるだけで良かった、お話しするだけで良かったのに」という。そして自分にはセックスする気は無かったのに、相手の男性がいきなり求めてきて、断りきれず性交渉をもったというのである。女性には男性の性の倉庫を実感できないので、生理的倉庫を実感してもらうために「おしっこをした後はすっきり、さわやか、溜まってくるといらいらするでしょう」と乱暴な例え話をする。射精の快感は排尿どころではないと男性の批判もあるが、女性はこの例で「あっ、そうか、我慢はつらいのか」とはじめて解る人も多い。しかし、尿と違って精子は体内吸収もするし、性には代替行為もあるので、「だから右手の青春が大切」とマスターベーションの話を具体的にしておくのである。

（4）セックスのルール

①相手が嫌がることはしない、②相手をきずつけない、中絶などで傷つけないことも大切だが、言葉の暴力もこころをきずつけるのでよくない。電車の中の女子高校生の会話であるが、大きな声で「あいつ、きっしょい」「あいつ、ださい」と延々と下品な笑いの中でクラスの男子の話をしているので、絶望的な気分になったが、人間性が失われつつある社会の反映かもしれない。③望まない妊娠はしない、させない。妊娠し

ないが先である。相手任せでは自分は守れない。被害者にも加害者にもならない、対等の性を生きてほしいとメッセージをおくる。

（5）性感染症

相談ではクラミジアが増加している。派手な症状も無く「ちょっと、おりものがおかしい」というので受診を進めるとクラミジアである。クラミジアは不妊症の原因となるので、きちんと治療してほしい。カップルで同時に治療しないとピンポン感染を繰り返す。中には尖形コンジロームもあるので、最近はどの子も不特定多数のセックスの危険がある。最近避妊をしない女性が増えているので理由を聞くと、アダルトビデオの影響で、女性のお腹の上に射精するセックスが普通と思っているようなのだ。だからコンドームを使わないでも妊娠しないという。ある女子高校生が講演前に控え室に居ると二人でやってきて「顔射はパックの代わりになる？」といきなり聞くので「目的が違うでしょう」というと「この前、彼とホテルにいったら先輩と会ったわ、相手がおじんやったから、あれは援交や」といったので「若いのに、ホテル代があるの、無いときはどうするの」と聞いてみた。二人でこそこそ相談して「誰にも言わんといてや、あのね、いいとこあるよ、障害者のトイレは広いし、誰も来ないよ」というので絶句した。公立高校で養護教諭も同席しているのに平気である。二人が居なくなると「あの子達できる子なのです。半分粋がって、つっぱって居るんですよ」と言われたので、ある意味そうかもしれないと納得したが、複雑な世の中になったものだと暗い気分になった。

3）教育評価とまとめ

思春期の性教育で事後にとった感想文から判断してみたい。（資料３）

思春期の生徒は、一般的に教師受けの文章を書くのに長けているので、殆どが「解った、大体わかった」というのも真実かどうか疑問である。講師受けも心得ているし、早く書き終えたいという感じがにじみ出ている感想文が多い。受講態度は、日頃の教育指導による学校格差が大きくこれも参考にはならない。同じ学校から依頼され続けることで、依頼者（教員など）のニーズに果たして応えているのかなと疑問を感じている。

児童は低年齢なので、その場の感想発表になるがあまり具体的な内容は無く「よかった」「良くわからなかった」といったものが半々である。母親への性教育は、参観日の後などの単発開催なので感想文は殆ど取られていない。従って教育評価は、受講者の口コミで筆者の活動が地域で広がっていくことで、確認するのであるが、生活の中で実践されているのかどうかは疑問である。「今日の話は分かりやすかった」「面白かった」と言った程度である。しかし「性教育は大切だと思った」「性のとらえかたを反省した」と言う意識変化は、講演後の感想を述べるなかで出されているので、今後も続けたい活動である。

しかし年々、性の課題が変化し深刻な問題に移行していることは事実であり、年に１回の外来講師の性教育ではなく、日常的、継続的な性教育体制が教育現場で構築されることを切に願うものである。

エイズ、避妊、中絶などの課題、成人や老人、障害者の性を機会があれば報告したい。

引用・参考文献

i　湯浅精二　1998年7月25日生命150億年の旅　新日本出版

ii　アドルフ・ポルトマン著・高木正孝訳人間はどこまで動物か2004年4月15日岩波書店

iii　桑原万寿太郎著　1989年2月20日動物の本能岩波新書

iv　石橋幸滋共著1993年3月15日思春期教室マニュアル日本家族計画協会発行

v　浅野千恵共著2005年1月10日女性のデーターブック有斐閣

Ⅵ　季刊誌セクシュアリティ 14－28号エイデル研究所

vii　北村邦夫1985年ティーンズノート神戸新聞社

viii　北村邦夫1997年5月20日ティーンズボディブック扶桑社

（おぐら　よしこ　本学助教授）

資料3

性教育事後アンケート（2003年）

1、 A女子高校1年生109名

よく分かった ４９％

大体わかった ４８％

わからなかった ３％

自由記載

よく分かった

・男女の違いがわかった
・初めて知ったことが多かった
・生理やおりものについてよくわかった
・お互い支えあって生きたい
・「エッチ」とか「やる」とか簡単な言葉で片付けてはいけない
・性感染症がこわかった
・中絶の影響がわかった
・性についてきちんと考えたい
・避妊についてもっと教えてほしい

よく分からなかった

・もう少し分かりやすく話してほしい
・話が早すぎる
・もっと詳しく教えてほしい
・もっと具体的に、実際に見たかった
・ちょっと気持ち悪かった
・難しかった
・進め方がおもろかった

2、 B中学校（男女）226名（2005年）

よくわかった 90名

大体分かった 119名

わからなかった 9名

無記名 8名

自由記載

よくわかった

・男女の違い、知っていると思っていたのに本当はわかっていなかった
・中絶の話
・性感染症
・望まない妊娠
・性のルール、自分の責任がわかった
・親の気持ちを良く考えたい
・めっちゃ大切と思える人と結婚できたらいいな
・話しやすい先生だと思った、相談したい

よく分からなかった

・基礎体温
・妊娠周期
・時間がないのでところどころわかりにくい
・後ろでスクリーンが見えなかった